



わたしの願い2

ー障がいのある子どもにかかわる先生方へー

府立だいせん聴覚高等支援学校
教諭 上田 大輔

自己紹介

○府立だいせん聴覚高等支援学校(6年目)

○担当教科 社会科

○部活動 卓球部

○障がいの種類

感音性難聴による聴覚障がい

(身体障害者手帳2級 所持)



私の聞こえ

- 聴力 両耳 100dB以上
補聴器を装用しているが、音声のみでのコミュニケーションはできない。
手話と口話を併用して生活。
- 私の聞こえ方
補聴器装用 → 母音 (aiueo) のみほぼ100%聞き取り可能。
→ 音声のみでの子音の識別力はほぼ0%。
- コミュニケーション方法 → 聴覚活用とリップリーディング

聴覚活用 → 補聴器を通して入ってくる母音

リップリーディング

→ 人の口形、舌の動き、顔全体の動きの癖、表情などから子音情報を読み取る。
- 頭の中で組み合わせることで人の話を「言葉」として認識する。

聞こえ方とリップリーディングの例

- A教員

「午後3時半に会議室にお集まりください。」



- 私の耳

「おおあいあいあいいういおあうあいうああい。」

- A教員の口の動きを読み取る。(リップリーディングの例)

「K」 → 喉仏が一瞬収縮する。

「N」 → 鼻が一瞬収縮する。

「R」 → 舌が反り返る。

この情報と耳から入ってくる音を組み合わせると...

「おごあんいあんに、かいぎいうにおあうまりくああい。」



「午後？？？に、会議室にお集まりください。」

ということになるのかな？？？といった感じで推測する。

→ ？？？の部分を「何時に会議室ですか？」

と同僚に確認する。



聴覚障がい者の言語認識(ろう者の場合)

○ 手話

- 「手話」という聴覚障がい(ろう者)の言語が軸となる。

※手話は万国共通ではなく、各国に固有の手話がある。

○ 聴覚活用

- 残存聴力を活用する。
言葉の認識は「日本語」が軸となる。

○ 聴覚活用＋手話

- 持てる聴力をフルに活用した上で、言語獲得の補助的な役割として、「手話」を活用する。
「日本語」と、それに対応した「手話」を併用するため、
言語の軸は「日本語」＋「手話」となる。



発達段階に応じた聴覚障がい児(者)への対応

幼少期～小学校低学年

友人関係

身体活動が中心であるので、コミュニケーション面において、不自由を感じる場面は青年期と比べると少ない。

学習面

「言語獲得」への支援が最も必要な時期。

→ 「自然な言語習得」が困難なため、「言葉のシャワー」を与え続ける環境が必要。

私の場合

3歳～12歳まで

→ 毎日 母とマンツーマンで発音訓練・言葉の学習をうける。

※本人が嫌がっている状況のなかでは、スムーズに獲得できないので、楽しく続けていく、日常生活の中で自然に習得できる雰囲気づくりが重要。



発達の段階に応じた聴覚障がい児(者)への対応

小学校高学年

友人関係

身体活動中心から、言葉によるコミュニケーション活動をとおした交流が増えてくる。

→ 友人の会話についていけない場面が増えてくる。

「言葉」による人間関係の構築をどのように進めていくかが課題。

私の場合

小学校時代は、聾学校以外で友達は一人もいなかった。
(勉強するだけで、友人と遊びに行った記憶が全くない)

学習面

「9歳の壁」にぶつかる時期。

→ 聴覚障がい児教育の永遠の課題のひとつとして挙げられている。

※小学校低学年までの単純な言語認識から、論理的思考ができるようになるかが大きな課題。



「9歳の壁」とは？

→ 脳に問題はないのに、小学4年生以降の学習が定着しない。

人間の脳は、「音」を使って思考しているといわれている。

- ・ fMRI (機能的磁気共鳴画像法) により脳の活動を調査する。
※ 文字や文章を見て脳のどの部分が反応するのかを見ると・・・

健聴者の場合

→ 脳の視覚領域が活発に反応する。
脳の音韻処理領域も同時に反応する。

聴覚障がい者の場合

→ 脳の視覚領域は活発に反応する。
脳の音韻処理領域の反応が弱い。

このことから、

視覚領域でしか、言語を認識することができない状態で、
「抽象的な目に見えないもの」について考える能力をどう身につけていくの
かが課題となっている。

○「9歳の壁」につまづいているかどうかを判断(例)

※あくまでも一例です…

100円玉 2個

10円玉 5個 どちらが大きいかわかる → 大抵の子どもは10円と答える。
(直感的なものの見方)

10円、100円という「単位」の概念をつかみ、

100円玉2個 > 10円玉5個

となることを判断する「形式的操作」がうまくできるようになるか、が課題。

※「見て理解する」

→「言葉で整理して理解する」という段階への壁でもある。



9歳の壁を乗り越えるために・・・

- 幼少期から「手話」と「聴覚活用」を併用

→「音声」や「文字・文章」だけでは見えない「抽象的な事象」を
「視覚的に理解」する。

ことで壁を越えようという考え方が現在では一般的。

- 私の場合

私が幼～小学校時代の時は、「手話」があることは知っていたが、日常生活ではほとんど使っていなかった。

どうやって乗り越えたのか??

→ 小学校に入るまでに小学1～3年の基礎学力を身につけ、
「抽象的な事象」を理解するための時間を多くとった。



発達段階に応じた聴覚障がい児(者)への対応

中学～高校生

友人関係

言葉によるコミュニケーション活動の内容が更に高度化していく。

- ・ 話題が広く、深くなるため「リップリーディング」が難しい。
- ・ 集団でのコミュニケーションについていけない。

私の場合

1対1での会話に不自由は無かったが、集団での会話の中では、ずっとニコニコすることで合わせるふりをしていた。

学習面

- ・ 小学校の時よりも内容が難しくなるため、ついていくのが難しい。
- ・ 「抽象的な内容」が更に増えてくる。

私の場合

毎日、翌日の授業内容を自分で予習し、当日の授業では自分が分からない所だけ学習する(話を読み取る)ことに集中していた。



中学～高校生の中で一番悩むこと

○「聞こえない」自分とどう向き合っていくのか？

→ 「聞こえない」ことで、「できない」ことや、「人よりも時間がかかる」こと、「支援が必要」なことが年々増えてくる。

「健聴者」と対等になるために過ごしてきた幼少期の自分の存在を否定される場面が増えてくる。

自分や家族の「努力」だけで乗り越えてきただけに、このような状態に陥っても、「自分の努力が足りないだけ」、「自分は生きている意味がない」といった精神状態になりやすい。

しかし、この葛藤を「自分の言葉」で説明できないケースが多い。

→ 更に自分の殻に閉じこもる。

→ 人との交流を避ける。

→ 「わかったふり」をするだけの日常になる。

→ 反社会的行動が現れる場合がある。

※この時期をどのように支援していくかが課題。



○ 対応

- ・ 本人の話を聞く。
- ・ 生い立ち(生育歴)を知る。
- ・ 「何をしたらいいのか」を一緒に考える。
- ・ 教員の考えを押しつけない。
- ・ 「聞こえない」ことで起こる二次的な障がいについて理解を示す。

○ 私が中学～高校生の頃

聴覚障がい児を受け入れたのは私が初めてで、周囲もどのように支援したらいいのか分からない状態だった。

- ・ 「1対1」で話してください。
- ・ 板書しながら話さないでください。
- ・ 校内放送は分からないので、教えてください。

といった物理的な提案しかできなかった。

※どうやって乗り切った？

→ できないことを無理して出来るようにしないでいい。

できることはとことんやってやろう。という気持ちで乗り切った。



現在の中学～高校生の場合

- 逆に、本人が働きかけなくても、「情報保障」がきちんと整った環境の中で育っているケースもある。
この場合、先ほどの例とは逆に、「してもらって当たり前」という意識を強くもっている人もいる。

対応

- ・ 全ての事に対して受け身になるのではなく、
「自分で考え、行動する」必要性を伝える。
- ・ 「必要な支援」については、本人からの要求の有無にかかわらず
整えていく必要はあるが、「わがまま」については断ること。
その際、なぜ受け入れられないのかをきちんと説明する。



聴覚に障がいのある生徒と関わるうえで意識しておいてほしいこと。

- 「わかりましたか？」と聞かない。
→ 本人の言葉で内容を説明してもらうような聞き方をすることで意思疎通のズレを確認する。
- 「聞こえない」からといって、必要以上に世話をやかない。
ただ、本人から話があったときはいつでも受け入れる準備をしておくこと。
- どんな些細な情報であってもきちんと伝える。
何気ない情報を自分で得ることができないので、知識の幅が狭くなる(偏りがやすい)。
- 「社会に出たら通用しない」という言葉を使うだけで、本人にとって必要な支援やコミュニケーションをおろそかにしない。



最後に、

一言で「聴覚障がい」と言っても人それぞれ、

聞こえ方、発音、読み取りの力、理解力、育った環境など個人差が非常に大きい。

また、みかけではわかりにくい問題を抱えている場合も多い。



「聞こえない」とはどういうものか、その本質を理解したうえで、本人とコミュニケーションを重ね続けていくことが、良好な関係を築く一番の近道ではないか。

